

# 日本と出会った難民たち ：生き抜くチカラ、支えるチカラ

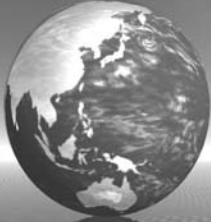
◆ 2013年5月28日(火)

● 午前9時00分～午前10時30分

場所／西宮上ヶ原キャンパス  
B号館301号

◆ 講師／<sup>ね</sup> <sup>もと</sup> 根本 かおる 氏  
(ジャーナリスト、国連UNHCR協会理事)

\*本講演会では手話通訳パソコンテイクによる情報保障を予定しています。  
また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますので活用下さい。



## ■講演内容

2012年に日本で難民認定を受けた人の数は18人と10年ぶりの低水準である上に、一次手続きでの認定率は0.2パーセントと1982年に難民認定制度ができて以来過去最低となった。これでは難民を救うのではなく、申請者を返けるための制度だ。

同じ理由で故郷を追われた家族・親戚たちが他の先進国では難民と認められているのに対して、日本では認められず、長く苦しい闘いを強いられている申請者が多い。認定率で他のG7諸国と桁違いの開きがある。しかも、認定の八割がミャンマー出身者に偏っているのだ。「難民条約」が掲げる「難民」にあたるかどうかの解釈で大きな開きがあり、日本の姿勢は国際法違反とも言えるだろう。申請中に受けられる支援はごくわずか、働くことも医療保険を受けることもできない人が多い。滞在資格がない場合には入管収容施設に容れられて「身体の自由」が奪われてしまう恐怖と隣り合わせだ。

彼らの多くが故郷では地位も教育もあり、社会を担う存在だった。こうした人々の迫害のおそれを適正に評価して難民と認定し、日本社会に受け入れる方が、社会の辺縁に排除するよりもずっと理に通っているだろう。せめてもの救いは、民の動きが着実に広がっていることだ。講演では、こうした新たな動きをとらえながら、日本の難民受け入れについて考える。

## ■講師紹介

兵庫県神戸市出身。東京大学法学部卒。テレビ朝日アナウンサー、記者勤務を経て、フルブライト奨学生として米国コロンビア大学大学院に留学し、修士号取得。1996年から2011年末までUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)職員として、アジア、アフリカなどの難民援助の最前線で支援活動にあたるとともに、ジュネーブ本部で政策づくり、および民間資金調達部副部長として世界の民間部門からの活動資金の調達のとりまとめを行う。WFP(国連世界食糧計画)広報官、国連UNHCR協会事務局長もつとめた。現在、難民をはじめ、人権・人道問題についてジャーナリストとして発信。国連UNHCR協会理事。

著書に「プータン―「幸福な国」の不都合な真実」(河出書房新社)、「ふるさとをさがして 難民のきもち、寄り添うきもち」(学研教育出版)、「日本と出会った難民たち―生き抜くチカラ、支えるチカラ」(英治出版)。

英治出版ウェブサイトにて、社会派映画コラム「スクリーンの向こうに故郷(ふるさと)が見える」を連載(<http://eijipress.co.jp/kaorueiga/>)。

総合テーマ：

Culture of Human Rights

一人権文化を育む

(2010～2014年度)